



「どうしたらできるか」を考え続ける

学校再開から1か月。2週間の午前授業、その後の通常授業の営みの中で、子どもたちは、3か月の空白を克服しつつあるように感じています。臨時休業開始からこれまでの間、子どもたちの健康、安全を最大限のお力で支えていただきました保護者の皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。この1か月は、教職員にとりましても、通常の業務に感染防止対策に係る取り組みが加わり、過重負担の状態でしたが、皆様のご理解とご支援のおかげで、子どもたちとの学校生活を共に作りだすことができている。これから先も、模索しながらの教育活動が続きます。引き続きご支援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

保護者の皆様の多大なるご協力のおかげで実現した、臨時休業期間中の「オンライン朝の会」「オンライン授業」の取組は、学校再開にあたってのいくつかの障壁を取り除くことにつながりました。一つ目は、入学式・始業式の日しか顔を合わせることができていなかった、新学級担任との心の障壁です。わずか十数分という限られた時間でしたが、毎日お互いの顔を見て会話を続けたことで、お互いの心の中に、担任と学級の仲間の存在が意識づけられました。学校再開初日は、どの教室も、特別なことが始まるというような緊張感はなく、「いつもの月曜日」のように、自然体で活動を始めることができました。

二つ目は、待ってくれない学習材の障壁です。春から夏にかけては、自然に積極的にかわり、直接体験を通して生命の尊さや自然界の仕組みの素晴らしさを考える学習内容が各学年に位置づけられています。動植物の芽生えや誕生、成長の時期は、人間の都合に合わせてはくれません。学校再開まで待っているわけにはいかない状況の中、各担任は、オンラインでのやり取りの中で、種まきや生き物の採取、成長の観察、記録の仕方を伝えました。子どもたちは、各家庭において日々大切に世話をし、自分が直接かわらなければわからないことに気付くことができました。学校再開に合わせて、各家庭で育てられていた生き物たちが学校に集まりました。現在、1年生はアサガオ、2年生はミニトマト、3年生はハウセンカの鉢が教室の外に並んでいます。毎年お世話になっている畑の先生はその光景を見て、「いつもと同じように、ちゃんと育てていたんですね。」と目を細めていらっしゃいました。

学校運営協議会「学び支援部会」の皆様も、子どもたちの食農体験を継続するために、「できる」を前提にその準備を進めてくださっています。こんな状況だから...と、子どもたちの貴重な学びの機会をあきらめるのではなく、「どうしたらできるか」を基本的なスタンスとして、実施する際に障壁となるものを超える方法を考え続けたいと思います。